

『曙の光、私たちに』 (要旨)  
 聖書箇所：ルカの福音書1章78節～79節

【1】「地」に住む人の無関心

世界で最初のクリスマス、すなわち救い主キリストの誕生は人知れず静かに訪れました。

救い主(キリスト)は、ベツレヘムの家畜小屋で飼葉桶に寝かせられたのでした。それは「聖なる者…神の子」(ルカ1:35)には似つかわしくない場所でした。

この時のベツレヘムの住民には、ナザレからやってきた無名の旅人をもてなす余裕はありませんでした。ヨセフは出産間近でお腹をさするマリアを考え、宿の一室を確保すべく奔走したことでしょう。しかし「宿屋には彼らのいる場所がなかった」(2:7)のでした。彼は世知辛い世を悲しく思うと同時に小さな部屋の一つも用意できない無力感におそわれたことでしょう。それでも彼は自分の置かれた状況の中で、できることをしました。なんと飼葉桶を即席ベッドに転用するというとっさの機転によって、生まれたばかりのイエスは、布にくるまって飼葉桶に寝かせられたのでした。人の往来もない静かな晩、誰の目にも留まらない場所でキリストは誕生しました。

【2】「天」の御使いの喜びの知らせ

その夜、ベツレヘムの野で野宿をしていた羊飼いに天の御使いが現れました。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」(2:10-11)

御使いは「民全体の大きな喜び」を最初に羊飼いのもとに知らせました。その後、御使いと共におびただしい天の軍勢があらわれ、神への賛美の大合唱が野原に響き渡りました。こうした光景は、人類史上稀有なものでした。御使い、天の軍勢が総動員し一人の男子の誕生の晩に、神を賛美したのですから。

神に仕える天の御使いは、この日の晩の意義をよくわきまえていました。神であるお方が人となられた。それも最も貧しく無力な者に。天の神が、それほどまでして、地に住む人を心に

留め、罪からの救いをもたらすためにキリストを送ってくださった。その意義を知る御使いは「大きな喜び」(2:10)を「地」に住む人々に、そう、私たちに届けたのでした。

【3】曙の光、私たちに

聖書は語ります。主イエスの誕生は、暗闇と死の陰に住んでいた者たちを照らすために、曙の光がいと高き所から私たちに訪れた出来事だと(1:78-79)。多くの人は自分が暗闇と死の陰に住んでいるとは思えないでしょう。2000年前のベツレヘムの人々もそうでした。彼らは際立って冷酷だったのでしょうか。マリアの宿泊を拒んだ宿屋の主人は心の冷たい人だったのでしょうか。そうではなかったと思います。もしもマリアが「聖なる者…神の子」(ルカ1:35)の母だと知っていたら、一生懸命に部屋の確保に努めたことでしょう。しかし、名もない「最も小さい者」(マタイ25:40)のために費やす余裕がなかったのです。良い人でありたいと願いながら、心の中でソロバンを弾くような私たちの隠された姿こそ、「暗闇と死の陰に住んでいる者たち」の現実なのです。しかし神は、神の御思いに全く無関心な者を見捨てることができませんでした。「神の深いあわれみ(※断腸の想い)」(1:78)によって「曙の光」が、いと高きところから私たちに訪れたのです。「曙の光」とは日の出のことです。

イエスの訪れは、私たちの隠された暗闇を明らかにするだけでなく、そこから自由にし、平和の道に導くのです。

あなたも「曙の光」としてお生まれ下さった救い主を心にお迎えしませんか？

「きよしこのよる み子の笑みに、  
 めぐみのみ代の あした(朝)のひかり  
 かがやけり、ほがらかに」  
 (讃美歌 109 番 3 節)

